鏡映しのテンペスト

黒桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鏡映しのテンペスト

【Ｎコード】
Ｎ１４３６ＢＡ

【作者名】
黒桜

【あらすじ】
能力者と非能力が入り混じる世界。
世界は、ある危機的な場面に直面している。
それは……この世界の命でもある、核陣（かくじん）といわれるものだ。
核陣とは水晶玉の形をして全部で１５個。
それは各地にある城や塔にある。
それは、世界で最強とうたわれている軍団がそれぞれの力で護っている
その名も「ラルス」

空に浮かぶ大きな城が「ラルス」の本拠地その名も「天空要塞スール」である。
で何が起きているかについてだが何者かに核陣が7個破壊されてた。
残りは、あと8個である。
残りの8個を破壊されたとき世界の崩壊が始まり破壊した者に新たな世界の創造が許される。
今、世界の存亡を賭けた戦いが幕を開ける――

幕開け

ルース　会議室

今の現状は最悪だ。
核陣を護るために俺が結成した軍団その名も「ラルス」以前、大きな戦争の時、世界最強まで謳われたこともあった。
今、その軍団が何者かの襲撃を受けており、拠点が落ちていく一方だ。
そこで、各拠点の長が集めって策を練っているところだ。
集まると言っても俺の能力で鏡を通して話している、そう俺の能力は鏡を自由自在、変化自在に出来るのだ。

「七瀬、状況説明をしてくれ」

俺の横に立っている赤髪の女性の名は、七瀬（ななせ）　桜俺（さくら）の秘書である。

「はい、では現状説明します」

彼女は、一歩前に出て説明する。

「被害状況、第一～第七拠点までの核陣が破壊されています、第一～第五までの拠点の長は死亡しており、あとの長は重症の入院しています、各、拠点の生存者は3分の一だけです」

彼女は、慎んだもの言いで説明した。
それを聞いた各、拠点の長はざわめきだす。
彼女は説明を続ける。

「また、報告をまとめると各拠点に一部隊を送られたようですさらに、第六と第七に関しては、拠点を落とした何者かが仲間の部隊と合流してから落としたと思われます、次に狙われるのは第八です、このままだとスールに到着するのも時間の問題かと」

彼女は、礼をして一歩下がる。

「で、どうするのか？についてだがアーク、対策案よろしく」

俺と対角に座っている青髪の男は、アーク・ヴァエストで参謀役だ。

彼は、立ち上がり

「この事態の対策として、スルーゲートの使用を許可をいただき拠点が危なくなったらそれを使いスールに戻れます、それと宮片（みやかた）魅春（はる）氏の力を借りて機械の兵士１５０体と大将レベル１５体を各、拠点に送ります、これを対策案としますいいかがですか？」

スルーゲートとは、このスールと各拠点を繋いでるゲートでその開門、出来るのは俺でけだ。

彼は、俺の方を見ている。

「いいだろう、で魅春は？」

と聞くとアークの後ろから小さな女子が出てきた。

「ここよ」

と言う。

この小さな女子が宮片（みやかた）　魅春（みはる）で彼女は能力は無いが機械を創るのに優れていて開発局の総責任者である、俺にとっては妹みたいな存在

だ。

「大将レベルの強さは？」

彼女は、にっこり笑い

「強いわよ」

と胸を張って言う。

魅春が自身満々に言うのならそれは強いのであろう。

「わかった、この会議の結論を言おう、アークの案を採用し、最高司令官、天城（あまぎ）鏡夜（きょうや）の名のもとスルーゲートを開門するいざとなったらスルーゲートを使い援軍としていく、これにて閉会とする」

俺達は、会議室を後にした。

「アーク、今すぐに機械兵を各拠点に送れ」

「わかりました」

アークは、携帯を取り出し

「今すぐに、送れ」

と言い携帯を切った。

魅春が俺の隣で何かを考えている。

気になった俺は

「魅春、何考えているのだ？」

魅春が俺の顔を見上げて

「いや、何でもないよ」

まだ、何か考えていそうだが本人が何でもないと言っているのだ何も無いのだろう。

「鏡夜、これから何をするの？」

と桜が俺に訊く。

「ゆっくり、お茶でもしょうぜ」

と言うと全員が

「はい」

「喜んで」

「うん」

最高司令官室

あれから2時間後のことだった。

緊急サイレンがなる。

どうやら第八の拠点に敵が攻め来たらしい数は８０２のようだ。

「援護しに行くぞ」

俺らは、スルーゲートを通って第八拠点に到着した。

そこら辺にいる、兵士に戦況を訊くとどうやらこちらが今、劣勢のようだ。
魅春が外を見ている。
「どうした？何かあったのか？」
と俺が訊くと魅春は外の戦場と自分で携帯らしい物を見比べていた。
「敵なかなやるね機械兵５０体に大将５体撃破か」
どうやら、あの携帯らしい物には自分の作った兵士の生存状態がわかるらしい。
さらに、魅春は眼鏡を取り出し、付けて戦場を見る。
「索敵開始、敵数４５７、指揮官らしき者２人」
どうやら、ただの眼鏡じゃあなさそうだ。
魅春は、眼鏡を外して周りを見るが皆、唖然としていた。
それを見た魅春が不安そうな顔をして
「何か？」
と言う。
俺は我に返って魅春の質問に答える。
「いや、何もただ凄いなと思って……」
魅春の顔が紅くなっていくのがわかる。
「褒めても何も出ないだからね」

と言って戦場を見ていた。

「鏡夜、そろそろ行かないと……」

桜も戦場を見てた。

「そうだな、行くぞ」

俺たちは戦場に介入すると形勢は逆転しつつあったが敵の大将もこちらに向ってきた。

一人は、赤髪で髪を右側に縛っていて左目に眼帯を着けている女ともう一人は、青髪で髪を左側に縛っていて右目に眼帯を着けている女。

容姿が似ていることから双子の姉妹だろう。

まぁ、どっちらにせよ……敵なのだ。

赤髪の方は銃と刀を抜き出し、青髪の方は刀を抜いた。

どうやら、やる気満々のようだ。

アークは、水の剣を作り出す。

アークの能力は、俺の能力を水にしたようなものだ。

俺も剣を抜く。

赤髪のが青髪に指示をする。

「ここを突破し、目的を果たす行くぞ　あの小さいのは任せるあとは私が引き受ける」

「はい、分かりました姉様」

小さいのて魅春のことか……

魅春も戦闘体制をとる。

「アルーテル・ギア……」

魅春の体に騎士のような鎧が装着される。
そして、魅春の右手には大剣が握られていた。
その時、赤髪が青髪と一緒に突っ込でくる。
俺は、全員に呼びかけた。

「来るぞ」

戦闘

青髪は居合いの構えで魅春に突っ込み、赤髪は銃を発砲しながら俺達の方へ突っ込でくる。
俺達に向けて放たれた弾丸は、剣を用いて弾いた。
それを見た、赤髪が微笑みだした。

「やるね、じゃあ挨拶はこれまで」

赤髪は刀を後ろに捨て、銃をもう1丁取り出し俺達の方に向けて呟く。

「赤銃(せきじゅう)……」

黒光りした銃が赤く染まり、銃口から銃弾では無く火の玉が出てきた。
先のように剣で弾くが、アークの剣は水で出来ている為に防ぎ切れなかった。
アークは、左腕を押さえていた。
恐らく先程の攻撃を防いだときに、直撃は間逃れたものの火傷を負ってしまったのだろう。

「アーク大丈夫か?」

と声を掛けるとアークは、平然な顔をしていた。

「大丈夫だ」

と言い、剣を再構築し一気に敵との間合いを詰めて横薙ぎの一閃をいれる。
しかし、赤髪はその一閃を回避するように刀のあるところまで後ろに飛ぶが銃は手元を離れ、腕にかすり傷を負う。
自分の腕を見ながら

「私に傷を負わせるとは……貴様らの名を聞いておこう」

と言う。

「私は、アーク・ヴァエストだ」

「俺はこの軍団の最高司令官、天城　鏡夜で、あそこの小さいのが宮片　魅春　こちらも名乗ったのだ君の名前も聞かせてくれないか？」

「よかろう、私の名は　朝霧（あさぎり）　静音（しずね）だ　そして、あの小さいのと戦っているのが双子の妹の　朝霧（あさぎり）　紫音（しおん）だ」

「で、君たちは何者だ」

と俺が問いかけると静音が落ちてある刀を拾い鞘に収めながら答える。

「そいつは、言えないよ」

その時だ、塔から信号弾らしきものが打ち上がる。
敵の軍は退き、静音は紫音に

「退くぞ」

と呼びかける。
紫音も静音と共に退いていく。

〜魅春　視点〜

青髪が居合いの構えで接近し、居合いを打ってくるが私は、大剣で防ぐ。
青髪は後ろに下がり体勢を立て直し刀の刃を魅春の方に向け

「面白いですね、あなた」

と言う。

「私のどこが面白いのよ！！！！」

「いや、どこも…」

青髪は、微笑んでいる。
愚弄される敵の一挙一動に、思わず感情が激高する。
コイツむかつく……！
私は、大剣を構えなおす。
青髪もまた居合いの構えをして

「赤剣（せきけん）……」

青髪の剣に紅い炎が包む。
居合いの構えで接近し居合いを解放つ。

「紅剣・道火（こうけん・どうか）」

地面に火の柱が駆ける。
迫りくる業火。
これは、マズイ……
大剣を地面に刺し
「光渡・月上（ひかりわたし・げきじょう）」
地面に刺した、大剣で切り上げると青い斬撃が地面を駆ける。
互いの技がぶつかり合い、相殺しあう。
さらに、青髪が刀を上に振りかざし振り下ろす。
「紅剣・炎火（こうけん・えんか）」
無数の火の斬撃が飛んでくる。
魅春も大剣を振りかざし振り下ろす。
「光渡・水月（ひかりわたし・すいげつ）」
無数の青い斬撃が無数の火の斬撃と相殺しあう。
青髪が息を切らせて座り込む、魅春も息を切らしながら座り込む。
青髪が息を切らしながら
「なかなか、やりますね」
魅春も息を切らしながら
「あんたもやるな」
その時だ、塔から信号弾らしきものが打ち上がる。

敵の軍は退き、赤髪が青髪に

「退くぞ」

と呼びかける。

青髪も赤髪と共に退いていく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1436ba/

鏡映しのテンペスト

2012年1月6日15時49分発行